

第一問

問一 電話線に固定されない携帯電話を自由に移動しながら使用するなかで、特定の場所と結びつけられた従来の電話機の固定的な性質を、その特性として改めて強く意識するようになったから。

問二 著者は、個と外部を結びつける固定電話のありようを考察する際に、家の中にいる側が「家から出る」という意識ではなく、むしろ会話の相手を「家に招き入れる」という意識にこそ着目すべきだと考えているから。

問三 生身の人間が現実には訪問する場合とは異なり、電話回線において、一切の視覚的要素を伴うことなく、身体からの声そのものではない、回線を通じた声だけで成り立つ訪問で、家にいる誰から見えず、ただ受話器を持つ人だけに話しかけてくるもの。

問四 携帯電話が普及する以前、家庭の固定電話は、玄関から居間へ移動し、各人の個室へと分散するなかで、現実の空間との結びつきを弱め、個と外部を直接に結びつけるようになっていく。その背景には、声だけの目に見えない相手と、実際に相手と対面する際の礼儀や配慮を気にせず話することができるという、電話というメディアがもたらした、他者の存在感の変質があるという事。

第二問

問一 花火で大いに盛り上がったが、今は最後の線香花火さえも消えてしまい、うらさびしい気分の中で、楽しかった時間を名残惜しく思い、その余韻に浸っていたから。

問二 飲み会が盛況になっていく様子と呼応した明るさを印象づけつつ、地上の騒ぎとは無縁な月を描くことで一区切りをつけ、明るさとは裏腹な「私」の感慨や、月と送り火の関係などが描かれる後の流れを用意するという効果。

問三 京都人として、はかなげな線香花火の色から、死者の魂を送る五山の火を連想していた「私」は、一緒に大文字の焰を仰ぎ見た思い出があり、今も大文字のことを尋ねてくる「君」にも、同じ感慨がないか確かめたかったから。

問四 線香花火のはかなくも健気な火は、五山の送り火を見た数々の記憶を想起させるものだった。だが、今年の大文字の日の天候が心配だった「私」は、今年の送り火は半月の日で、月の助けはないことから、ほぼ満月の夜にともった線香花火を、過去に結びつけるのではなく、月の加勢を得た迎え火と見立て、今年の送り火が明るく燃えてくれることを願いたいと考えたから。

第三問

問一

- (ア) 困窮していた
- (イ) 見苦しくない状態
- (ウ) ひどくいとしく思うため
- (エ) 歩いて

問二

娘の将来のためにと決意して参籠した石清水で、夜通し祈る母の悲痛な思いをよそに、娘が物思いもなきさうにずつと寝ていることが情けなかったから。

問三

中途半端な言葉で神に祈ったとしても、それでは言い表すことができないくらいに、自分の身の上を非常につらく思っている心情。

問四

私が自分の身の上をつらく思う気持ちは、あたかも清水を汲むように、石清水の神は汲み取って分かってくれているだろう。

第四問

問一

ひと晩はどうして五更なのですか。

問二

漢・魏の時代以降、ひと晩を甲夜・乙夜・丙夜・丁夜・戊夜と言い、鼓を用いて一鼓・二鼓・三鼓・四鼓・五鼓とも言い、一更・二更・三更・四更・五更とも言うのは、すべて五つを区切りとしている。

問三

寅より午に至るまで凡そ五辰を歴。

問四

北斗七星の柄の先端部分は、夜が長い冬でも夜明けまでに六つの方角を指すということはなく、夜が短い夏でも夜明けまでに四つの方角しか指さないとすることはなく、どの季節でも五つの方角を順次に指していくということ。